

【ポスター発表】

希望進路を目指すまでのプロセスに関する研究

—社会的養護下の高校生への面接調査から—

○ ユマニテク短期大学 平松 喜代江 (6444)

堅田 明義 (中部学院大学・9518)

キーワード：希望進路，プロセス，高校生

1. 研究目的

児童養護施設在籍者の大学等進学率が低い理由として梅谷（2019）は、施設在籍者の大学等に進学することが施設職員の進路支援の対象になっていないことを指摘している。そして、施設の方針や職員の大学等進学に対する姿勢などを含め、措置された施設のインケアにおいてどのような支援を受けられたかが、施設退所後の生活に影響を与えるのではないかと指摘している。以上から私たちは、児童養護施設の進路支援の特徴について考察した（平松・堅田 2021）。その結果、「情報教示型重視支援」の施設が全体の6割を超えていることから、希望進路の実現には在籍者自身のニーズに沿って学習支援することを基盤として、施設職員から提供される様々な支援によって希望進路が実現していると考えられた。さらに、在籍者の大学等進学率の低い理由には大学の授業料の準備だけが課題でなく、在籍者の境遇や生活環境を考えると、「大学に行きたい」との目標がもてない在籍者もいることが示唆された。そこで、現在養護施設に在籍している高校生を対象とした面接調査による希望進路を目指すまでのプロセスについて検討する。

2. 研究の視点および方法

社会的養護下の高校生が希望進路を目指すまでに、どのように判断、選択し、行動しているのかを捉えることで適切な支援とその時期が明らかになり、社会的な対応や対策が効果的かについて明確化できると考える。そこで、希望進路を目指すまでのプロセスと進路支援について面接調査を実施する。

調査協力者：NPO 法人が主催する社会的養護の下で暮らす高校生を対象に行う「大学等助成制度説明会」に参加した高校生に対して質問紙調査協力の同意が得られた26名のうち、後日面接調査に協力の意思を得られた4名を調査協力者とした。

いずれもA県内の児童養護施設2か所2名と自立援助ホーム1か所1名、B県内の児童養護施設1か所1名が調査協力者となった。

調査時期：調査は2017年7月から2017年8月に実施した。

調査内容：面接調査の内容は、「施設での生活」と「希望進路について」にわけて、それぞれの生活における「家族の状況」「家族の経済状況」「本人の生活状況」「本人の学校の状況」「社会資源」「本人の心情」について自由に話してもらった。

調査手順：面接調査は、半構造化質問の形式をとり約1時間行った。面接は調査協力者の

了承を得てICレコーダーに録音した。

面接調査結果の処理：録音された4名の協力者の録音記録は再生して逐語録を作成した。作成された逐語録から希望進路を目指すまでのプロセスについて、小学校、中学校、高等学校の各時期における「生活状況、希望進路、契機」について総括表を作成した。

3. 倫理的配慮

調査は日本社会福祉学会研究倫理規程を厳守した。調査に際しては開始前に配布した書面により口頭にて調査の趣旨を説明するとともにプライバシー保護を遵守し、研究目的以外で調査結果を利用しないことを説明し承諾を得た。また、調査結果については分析・検討に際して個人が特定できないように配慮した。本研究は中部学院大学倫理審査委員会(受付番号:E16-0018)の承認を得た。なお、共同研究者には報告者としての許諾を得ており、日本学術会議が示すオーサーシップの在り方を参照し全ての要件を満たしている。

4. 研究結果

希望進路に対する選択や判断をどのようなプロセスで行ったのかについて、小学校、中学校、高等学校の3時期にわけて、「希望職種・進路の有無」「進路への準備」「金銭管理」「相談相手・ロールモデルの有無」を4つの枠組みとして分類した。

希望職業・進路を目指す契機は社会貢献や親孝行といった観点から選択していた。そして、希望進路の獲得は、高等学校という時期であっても可能であることが示唆された。協力者たちは、常に希望と現実との狭間で不安な気持ちを抱えており、いかに希望進路にむけてのモチベーションを維持し続けることの難しさが語られた。また、希望進路を喪失したとしても、学習環境を整備して支援していくことで、希望進路を獲得していくことが可能であることがわかった。金銭管理に関する語りの中では、協力者たちの希望進路実現に対する不安な気持ちが最も多く語られ、希望進路実現のためには勉強とアルバイトの両立が必須条件であることがわかった。希望進路の有無には、相談相手の選択肢を複数もっていること、ロールモデルに出会っていることが大きく影響していた。

5. 考察

調査結果から、「希望職種・進路」の出現時期に着目して希望進路を目指すまでのプロセスを3つの類型(希望進路一貫型、希望進路自己調整型、希望進路他己調整型)に分類することができた。進路選択を考えるうえで少なくとも、高等学校の時期にはロールモデルと出会える機会を平等に得られる意図的な仕組みが必要と考えた。そして、経済的に頼れる相手がいない協力者たちは、希望進路実現のためには勉強とアルバイトの両立が必須条件であることから、これらを可能とする仕組みづくりが求められる。

文献：平松喜代江・堅田明義(2021)「希望進路を可能にするための支援に関する研究—児童養護施設における支援の特徴について—」『日本社会福祉学会第69回秋季大会ポスター発表』(Zoom ミーティング, Zoom ウェビナーによるオンライン)

梅谷聡子(2019)「子どもの自立を促す児童養護施設のインケアに関する考察：アフターケア相談員へのインタビュー調査から」『同志社大学社会学会』131,95-121.